

松阪菊 (Matsusaka Chrysanthemum)

2016(平成28)年9月
松阪三珍花保存会

● 松阪菊(きく)の歴史

松阪菊(Matsusaka Chrysanthemum)は、嵯峨菊・江戸菊・肥後菊と共に古い歴史を持つことから「古典菊」と呼ばれています。松阪菊は大輪型と中輪型の二系統に分けられ、その由来を異にしています。一般に、伊勢菊と云われているのは中輪菊のことで、松阪菊には中輪菊と松阪糸菊と云われた大輪菊が含まれ、特に大輪菊が存在することはあまり知られていません。

1. 大輪型松阪菊

大輪型松阪菊(松阪糸菊)が初めて作出されたのは1830年頃、松阪新町に住んでいた菊愛好家の木下藤八によるもので、毎年実生により幾多の新品種を作出・販売して、開花期には、江州から京都方面に迄も、この菊を墨塗りの入れ子の箱に収め、その花を見本として、菊苗の販売をも行われたと伝えられています。【保存会で2006年頃入手した1857(安政4)年の勢州大菊番付表には勸進元・松坂新町松屋藤八、差添人・桑名佛願寺、頭取・外宮宮後弾正 古市麻吉など、行司・栃原茶屋 津野田善行寺など、大関・松坂新町 米喜 久居多田伊兵衛、関脇・小結・前頭・世話人格など総勢170名余の名があり大輪型松阪菊の栽培が当時の伊勢各地で盛んであった事がうかがえます。】

その後1885(明治18)年頃、松阪中町の脇田藤助が木下藤八からこの菊を譲り受け、熱心に栽培していたが、1893(明治26)年3月29日の松阪大火の時、大部分を焼失してしまい多年の丹精と苦心が無くなった。しかしその当時、他にも本種の栽培者があり、中でも特に松阪三珍花の愛好家で新座町の長林堅三郎(1876~1937)や津市の坪内為三郎などが栽培しており全滅をまぬがれ、丹精の甲斐があって大輪松阪菊だけの菊花展覧会が盛大に催された程であった。しかし明治初期から中期までがこの菊の全盛期でその後は華やかな厚物菊や濃艶名な管物菊などが栽培されるようになって、大輪型松阪菊は繊細で弱い性質のためか少数を残すのみとなった。1921(大正10)年9月、宮内省から松阪菊栽培状況について松阪へ視察に来られた時には大輪型の優秀なものが減少していたが、日野町の前川吉次郎、津の宇野常吉、坪内為三郎らによってかろうじて保護され、特に前川の確実な品種9種ほどが確認され記録されたと伝えられています。

長林は松阪三品(松阪菊、松阪花菖蒲、松阪撫子)の品種保存、育成の指導者として明治・大正・昭和と活躍した。指導を受けた立野町の県立飯南農学校教諭岡村金蔵(1903~1976)は当時日本を代表する園芸誌「實際園芸」に「伊勢菊の品種と栽培」(昭和10年6月号)を発表した。その中で大輪型を伊勢菊或いは松阪菊であり中輪型を三重菊としている。長林没後、松阪菊は殿町の中井喜平や松阪花卉園芸組合の組合長服部栄次郎らに引き継がれた。【岡村没後の2011(平成23)年11月に子息の立野町岡村伸治宅より『「伊勢撫子 伊勢菊 伊勢菖蒲 について 三重県立桑名女学校 岡村金蔵」の表紙、黒用紙に三花関連写真58枚26頁および三花の花粉・柱頭拡大スケッチ図など8頁、原稿用紙(頁符号1~311)最後に昭和11年3月22日』の作品が発見され、保存会で預かっている。三花に関する記述は実際園芸に投稿した内容とほぼ同じであるが写真・スケッチ図などは極めて貴重であると思われるが残存する品種との符号など十分な検証が出来ていません。】

戦後、服部栄次郎から三重大学の冨野耕治博士らに松阪菊の分譲がなされ三重大学で各地から松阪菊の収集を行い、栽培、研究、新品種作出などが行われその後、明野高校・篠田晴二郎に分譲された。1952(昭和27)年三重県教育委員会により伊勢(松阪)三珍花が天然記念物に指定された

が松阪菊は中輪のみである。1971(昭和46)年1月松阪三珍花の会(現、松阪三珍花保存会)が発足したとき富野博士より大輪型古花として「美香」「糸錦」の苗を譲り受けて栽培し、更に1985(昭和60)年には当会員の努力により実生から新品種「松阪紅宴」「松阪茜」「松阪糸紫」が作出され会員が栽培育成し古花と併せて毎年の松阪菊展にて展示されています。

以上から江戸時代後期に松阪で木下藤八が作出した大輪型松阪菊は186年経過した今、現存する品種が余りにも僅少であり、様々な理由が推測されますが、実に多くの品種が絶えたことがわかります。朗報としては会員が2009(平成21)年国立歴史民俗博物館くらしの植物苑に寄贈した大輪松阪菊3種の内1品種から実生で「くらしの植物園作出(実生)松阪菊 みだれ髪」が作出され、毎年の「伝統の古典菊展」に展示されている事があります。

2. 中輪型松阪菊

一般の伊勢菊(中輪型松阪菊)は染色体数の比較や形態から嵯峨菊を改良した品種と推定されています。この由来は2説あり一つは1412(応永19)年、南朝の小倉王が京都嵯峨村亀山御殿に居られた頃、伊勢の国司・北畠光雅がこの種を拝領して伊勢の国に持ち帰り、培養の結果本種が作り出された説と、また京の都より差し遣わされた伊勢神宮の斎女(いつきめ)たちが、折々の手すさびに京から取り寄せて植えたのが、伊勢の風土に馴れて次第に改良されたものだという説があります。何れにせよ原種の嵯峨菊が、松阪の気候風土と栽培者の研究努力により現在のような見事な品種が作出されたものと推定されます。

更に1845(弘化2)年頃、大輪型松阪菊作出者の木下藤八が実生で多くの新花を作出し、その後、松阪や伊賀地方において多く栽培され、1867(慶応3)年頃から毎年開花期には津城内へ納められて、城主藤堂氏の庇護のもとに観菊の宴をもたれ、特にこの菊を愛し観賞されたとの事です。明治、大正の頃には宮内省の観菊会に花壇が組まれて観賞され、伊勢地方に於いては、松阪の長林健三郎、前川吉次郎、津の宇野常吉、坪内為三郎氏などの熱心な愛好家が出て栽培が続けられて来ました。大正末期から昭和にかけて、わが国に於ける菊の科学研究に大きな業績を残された丹羽鼎三博士が三重高等農林学校在職中に、松阪菊の品種を松阪や津から集めて実生栽培を重ねて優良品種多数を選出され、改良に努力された結果、沢山の品種を作出され、三重号なる名称で発表されていました。

1928(昭和3)年11月天皇・皇后両陛下伊勢神宮ご参拝の際に丹羽博士が奉納した本種を特に御嘉賞されたとの事で、翌年5月には、本種45種を特に選んで宮中に献上せられ、毎年新宿御苑で栽培され開花期には花壇が生まれ一般の参観に供している。

戦時中の混乱によってこれらの品種は殆ど散逸し戦後は見る影もなくなりましたが、松阪の愛好家で殿町の中井喜平、立野町の岡村金蔵などの手によって僅かながら残存されていました。また三重大学にては、郷土の自然文化財復興保存のため、松阪付近をはじめ、新宿御苑、明石公園などから残存の品種を集め、郷土の文化財として、富野教授を中心に、これらの品種の保存と、新品種の育成に苦心を重ねられた結果、1951(昭和26)年、陛下の三重県御巡幸にあたり、大学構内に菊花壇を作り御覧にいらしたとのことです。1953(昭和27)年、三重県教育委員会は中輪菊を天然記念物に指定しました。

1952(昭和45)年、松阪市立公民館(現在の松阪公民館)に於いて、郷土植物の復興のため園芸講座を開設、菊の講師に岡村金蔵と中井喜平に依頼して、翌年1月に「松阪三珍花野会」(現在の松阪三珍花保存会)が発足し菊苗を三重大学や明野高校から譲り受けて会員の栽培が始まった。その後、中井喜平由来の中輪型松阪菊10種を入手し会員が育成に努め、1998(昭和63)年11月現在中輪型45種、大輪型5種の品種を保存して現在に至っています。

毎年11月中旬の松阪公民館前庭に会員により展示小屋を設置し、大輪および中輪松阪菊を「松阪菊展」として展示している。昨年2015(平成27)年度の出展者は15名191鉢であり、展示会後に有志により本居宣長記念館、松阪市歴史民俗資料館、松阪商人の館、原田二郎旧宅にも展示しました。本年よりは松阪菊発祥の地の松阪市新町3丁目919 岡田晃三宅の花碑前にも展示予定です。

●松阪菊(きく)の特徴・仕立て方

1. 大輪型松阪菊の特徴

- ①花弁は針管、或いは細管弁で長さ15cm～30cm。茎・葉。花共によく大菊細管物に似ている。しかし花弁は玉なしでなるべく細く外縁部のものは長く、内側の花弁は短くて長短弁が混合して一花を形成しているものを品位ありとしている。
- ②弁先は玉なしの延きり弁が普通で中には玉巻きのものもある。その花弁数により一重咲・八重咲きなどがあるが弁数が少ないものを優良種としている所は一般大菊類と大きく異なる。
- ③花芯部は露芯型のものを優品とし普通大菊類の観賞価値から言えば、劣等野咲き方に属する。咲きかけが独特の渦巻き状でほぐれるように開花するのも他に見られない花芸とされる。
- ④葉形も種々あるが長葉で深切れのものが多く、優良種にも反転葉のものも見受けられる。茎も概して細い。
- ⑤優雅で繊細なため、全体に弱い。
- ⑥花の色は白、黄紅樺その他の間色と普通菊と変わりはない。花期は普通菊よりもやや遅い。

2. 中輪型松阪菊の特徴

- ①花、茎、葉共にやや小型で中輪型に属する。
- ②花弁は捩れ管状に見える平弁で、咲き始めは独特の渦巻状に属する。
- ③弁先が、裂ける、巻き込む、何本かに分岐する、それらが混じり合うなど、変化に富む咲き方をする。
- ④花弁は長く、大部分の花が縮れて垂れ下がり、如何にも繊細な感じが強い。
- ⑤色彩は鮮明で白、黄、樺、桃、紅などの無地のものの他に咲き分け、ぼかしなど変化が多い。
- ⑥葉は深切れで、小さい切れ込みの多いものがある。
- ⑦花期は秋菊としては遅咲きで、11月上旬～中旬である。

3. 松阪菊の仕立て方

①大輪型松阪菊

- ・天地人の3本仕立てとし、必ず支柱を立てて輪台を付ける。
- ・鉢あたりの花数は、3花とする。

②中輪型松阪菊

- ・天地人の3本仕立てとし、必ず支柱を立てる。
- ・鉢あたりの花数は、1茎5花として合計15花とする。
- 咲き分けの「源平咲き」は3本仕立てとして摘芯をせず花を咲かせる。

中輪型松阪菊の仕立て方の詳細を図示する。

仕立て方～天、地、人づくり(中幹種)

